雅吉の詞集

特別
へ4
8151
2

貴
14
8151
2

続古和謌集巻第三

秋哥

秋立日侍従の君

秋来ぬと聞きつるかなよ萩の葉の吹かぬ風

大納言師頼

鳴くよりの外に吹かぬよ吹風の音ばかりこそ秋を知りけれ

秋立日うへの御こと琴の河原に

せゝらぎは聞くもまれなる音なれ

貫之

河風の涼しくもあるかな秋来ぬ

法性寺入道前関白中納言中将よばりけるとき

山家早秋といへるこころばを詠ける

菅原在良朝臣

山里は暮れゆく秋を深くとや風の音にも鹿の鳴きそめ

藤原季通朝臣

これ神ぬ宮の海に秋を来にけるもとに紅葉の風のおとにぞ

藤原資季朝臣

人の秋のことを初秋のころをはじめてけり

久安百首歌 秋の初の歌

足引の山風のいとのすさまじく貢ぎ人に秋はきぬらん

大炊御門右大臣

いつしかと今朝吹風の音にて秋の来ぬるを知るかな

秋のゆく方を尾花とうらぶれて

西行法師

常なれば秋の尾花の枯れぬ心知りてぞ

内大臣

天津風雲の通ひ路吹とじよ乙女の姿しばしとどめん

小町

袖の露月の光しうつるまで秋の来ぬるを

西行法師

須不

長月に菊の露ふる宿ゆゑ
初秋のころを
皇太后宮大夫俊成

草もみな枯れぬ秋の初風に
入道摂政家より秋三首奉られけるに
権大納言資雄

消てうきけふ
明るかしの月ぞ秋はあはれ
法性寺入道前関白太政大臣

朝露は玉の小櫛の里なれや
枯きにけりと作りえぬる
七夕地儀とうるはしかりけり
院御製

天川年に渡りの舟なれやくれもさたけり
貞和二年百首の内
後園屋前関白左大臣

さらぬ夜の契の秋の七夕
同七月七日三首奉られ侍りし七夕
前関白左大臣近衛

ふる年を
幾秋をへぬ契や七夕
七夕
凡河内躬恒

年毎に逢ぬ人をとは七夕
前中納言基良

思ふこと尽くしてなほ七夕は　一夜ぞ秋の　明けぬるかな

正治二年百首歌よ　　前大僧正慈鎮

七夕の　今宵ぞ　雲ぬぎ　たなびく星合の　空

侍従の　袖ぬぎ　かさね　月日の　合ひの橋

後伏見院御製

天川　秋の契の　深ければ　渡りかさねの　橋

察主補親

流るる　契をも　天川　逢瀬ぞ　一夜ぞ

權大納言實教

式子内親王

袖ぬれて　衣を　重ね　久しの　天川　秋の　暮れ

前大納言隆房

七夕さに　秋の一夜を　待ちえて　星合の　空

源重之

織女の　前に　日ぐらし　秋風の　吹く　夜毎に　ぬぎ　重ねつる

建長三年九月影供哥合　　九近中將經平

白雲に　花の　散り　女郎花　誰　立ち　今　紅葉　なるらん

廉義公家哥合　　峯邊秋花　　紀時文

約水の新を掬ぶ女郎花もこゝにけんを袖ぬらしぬる

人の家に水のたまりよりみるゝけぶりを積

堀河右大臣

女郎花新を掬ぶはんの花ありもなかりけり

二条院讃岐

題不知

弱きて旅寝を給ふ女郎花も徒や夢を見けむ

讀人不知

菅家萬葉集より

なみとゝ志のく想ん女郎花人のわきそうくを

貫之

をとなへし匂ひを神よ掬たゝ後ゝくや神をとゝろん

堀河院百首より

基俊

あ角ゆゝんをもとゝぬ秋風よあはれ女郎花邪

後西園寺入道前大政大臣

風衣神を家家をとゝ秋風を家てこゝ

照慶門院

草毛木しなへて秋けき多る秋の色や宮方ゝ

凡河内躬恒

秋の中の月の影や掬ゝ秋衣てゝ花けゝ

弘長百首より

前中納言定家

なにの那波なる人秋雪

朝夕を

夏陰ゆめと鳴くほとゝぎす

中務卿親王

ありとても頼へきの八葉成

和泉式部

山の端の紅葉の朝霧

貫之

故郷の蘭とゝ寺と

前大僧正道性

籬は海何の人伝ゆゝ

庵草の露とゝ心成

如願法師

鳴くほとゝぎす雲を庵を秋の夕

西行法師

松の風秋をいとゝ物すさまじ

宗徳院

待賢門院堀川

はるの夜の家の上よ秋の月

西行法師

ゆく末義の有義八幡宮

略之 澤の秋の夕暮

中くよりの風を音なひて夕暮れ淋しき山の松をとんでけり　後鳥羽院御製

何ごとぞ人の訪はぬを思ひ知る松の夕暮　前関白左大臣

常盤なる青葉の山も秋ぞ色ぬりけり　前大僧正覚忠

さ色なる色をとりそへなりけり楓ぞ山の松の夕暮　宰蓮法師

野虫

長き夜何を恋ぶとて秋の虫よ枕に近く鳴くらむ　大蔵卿隆博

山里に頼まる人を見るよりも松に近くぞ鳴くらむ　前摂政太政大臣

人を思ふ涙の秋の村雨よ袖にもかかる虫の鳴く　土御門院御製

草葉に置く露毎の秋風よ人を袖に松虫の鳴く　従二位家隆

前左兵衛督教定

秋の宿の庭に秋萩咲きぬ朝ぼらけ霧の色うるはしく

秋の中の

蛬鳴くなり夕暮れ霧の色うるはしく　蓮生法師

妹萩の下ふるれ帰鹿の洞や花の盛をもとめん

秋のよる人をとめし初て小野よ海ゆ亀里

はつ〻鹿の声を聞

壬生忠岑

鹿の音を聞よはけしく侘人の心をくるしめらるゝ小ゆゝ山里

霧間朝鹿といふ事

忠房朝臣

秋霧れ朝の山よ書こ絶てゆゝ更ぬしも鹿の覚

前大納言為家

鹿をよめる

貫之

妹萩ゆゝみ山の露八雲鹿の洞ゆゝ忘れをる洞ゆゝけり

従三位為継

秋草れ色ゆゝくゝれて行景の朝の鹿をたゝくゝ

前左兵衛督教定

雪山鹿

夕雪の山の高根よ雪鹿を天ゆゝ書を為ゆん

藤原景綱

題不知

はつ〻ゆゝれたる深山やあれんてゆゝ月よ鹿を聞

前中納言定家

苔鹿

小男鹿の朝の苔れ雪ゆゝ面ゆゝ見ゆゝ為ゆん

壬生忠岑

山里の秋夕くれ雨はれて書院とる所に有けり

前大納言實教

嵐山入相の鐘を聞て今も昔ぬしと庵を聞ける

民部卿資宣

初瀬山月ぬ出て度に弱る付て和歌浦の音ずれを聞ける

人丸

さらぬ秋の親家に雲くれはまうふ鹿の聲はやけさ

権中納言通俊

山里を霧立こめて人の親しらの庵の音ずれ

正安三年八月十五夜内裏十首哥より暁月聞庵

余所のうきく初さ人ぬ悔庵の事絶はてくあるの宿

月前聞庵

九大臣

高砂尾上の月ぬ雪庵の松風の音

前大納言經継

遠方に雲のうちうれきて初夏の松

入道二品親王覚誉

初鳥月雲井の余所よりあはれと声をきくよ海の月

俊頼朝臣

藤原雅冬朝臣

今うけ秋の初風やいろんの好うねし鳥てきにう

在原元方

結人よあらぬ初りけ紅鳥と忘の陰き水

中納言家持

春ふく風ハさにけりはまもとく吹ハ今や色深ん

和歌所あく蓄山乃麓鳥つまを待せて後

皇太后宮大夫俊成

けりう

小倉山葉けの寺のりわひよあぬ事那ら海ら高合

百首なけ時

常盤井入道前大政大臣

初鳥のきゝ河なく杜乃森深さ秋ハ来けり

嵯安門院一条

急泉新元月の入方よ市もとやしん海の秋

伏見院御製

連てふあるけはなさ横き月乃下行東ハ風合

式子内親王

萩の上よ鳥の関のそ多ハこりよけり月よ鳴ひて

西行法師

那りよ蔵寺ハなりあそ月ふとあく明ら法那

殿富門院りて人と百首多後侍けり河月ら

あらしの後の月

前中納言定家

ながめてもなほ残りなき月かな

藤原重綱

秋の月ながめしもの思ひ

権中納言定家

天の原ちかくなるまで秋ふけぬ

元亨三年八月十五夜

御製

秋の空澄渡る月のかげ

従三位頼政

月をもてあそぶ

出ぬる山のあなたをとはばや

元俊朝臣

何くまもなく澄渡る月

崇徳院御製

見ぬ人の雲の上とはひかるる

嘉元百首

月の光

前大納言為世

海辺月

[illegible]

俊恵法師

[illegible]

前左兵衛督為教

秋の[illegible]月を[illegible]

建仁元年八月十五夜和歌所撰歌合

深山暁月

[illegible]

大蔵卿有家

[illegible]

文治六年女御入内屏風

家池遇人

前中納言定家

月[illegible]

天津風みやこ雲井に照月の[illegible]

月不撰處

大納言経信

久堅の空に[illegible]秋の月何[illegible]

湖上月

藤原有家朝臣

月[illegible]

九条院四宮[illegible]

[illegible]

大納言成通

はもとより墨なる秋の月なれば人さへよをぬる哉

撰人不知

秋の夜の月の影のうつるあのうらうら篠の葉にもうつれる

元亨二年八月十五夜和歌十首会

墨なる河代の月さやかなり流れを月を秋の空よりぬる哉

二品親王覚助

水の面に雁の声を聞くなれば月を添へて墨ぬる花とぞ見る

太宰大貳重家

文永二年八月十五夜哥合 停年月

鷹司院御製

水の面に数々秋の月うつれば空あらし今を盛りなれば

嶋おろす池上月を

京極関白大政大臣

大空を池の面も墨なりぬ今宵ハみちてすむ月かな

延喜御時八月十五夜月歌

源公忠朝臣

いかゝ人をおもふ心の秋の月ぬれ衣をかこつ涙

右大臣

音なれぬ名よ秋の夜の月を今宵を流りけれ

藤原忠正

月ぬれ衣なる秋をなれ知れ多く今夜の涙哉

秋人の袖と秋のまそをしらぬ今宵は月ばかりなれど

登蓮法師

何くもる今夜の月をなぐさめの同じ空なる清らん

民部卿忠教

今宵はいかなる義にか月やどりのかをみるらん

宗徳院御製

雲晴れぬすみけり月の今宵はいかなる義にか沈みなけまし

前大納言忠良

月をこそ義にも沈みなけまし

西行法師

天満宮今夜の名月を惜しんで棚に清き雲もなし

寂起法師

待わびる秋を今ひと夜の月の光清く澄む月哉

法印憲賢

月哉同じ空なる月秋の夜ぶかく今ぞ八月

讀人不知

月前松風

月の哉月の秋の南の松風ひとぶきもまれる夜

皇太后宮大夫俊成

道助法親王家百五十首歌中月

前中納言定家

幾さとり秋の塩路をとふ舟

藤原忠隆

雲のうへの月のかげ

見月

太上天皇

幾たびかあはれを思ふ秋を経て

遊義門院大藏卿

住なれぬ雲居の月の光

天台座主明快

雲ぬけて星ぬけ蓬生の宿

正三位知家

雲ぬけて月の秋の夜

西行法師

海原はかぎりしらぬ秋の月

皇太后宮大夫俊成

百首歌奉時

月をたづねて千里ぬかをもとめ

藤原範家朝臣

住人もなき山里の秋の夜

前大僧正實承

いまはとてうかれ出ぬる人の

大納言顕實卿

乃ぬ世間くらく海山秋の雲やむしれ焼みるん
月お風とうふまを頼ほかりけり　伏見院御製

村雲も山の端遠くうり果て月ふる夜岩の松風

同

嵐吹き雲はらはれ空すみ渡る月うけ

前大納言為家

天村雲さしてふかさきれ焼くみ秋の夜の月

後嵯峨院御製

蓮葉村玉かとみな池のれ濁よ去ぬ秋の夜の月

入道二品親王覚譽家五十首歌

源頼康

みなもとは西の山も晴る月影やんを照ぬかりとなる海辺

野径月　摂政太政大臣

約束空はひとつのむさしゆに草村原より出る月影

九月十三夜月を

左京大夫顕朝

蓄秋月の海八面ねと光をつらよみちよ世

水上月　讀人不知

水や空空やあらもみ月かりひて流る秋の夜月

照月は光をかすかにして青さくらの山川農の家よりあり貧家の秋の夜の月

大僧正慈鎮

ひとねさしたるかたはらの秋の夜の月の雨よりあり月の影

後京極摂政大政大臣

月ゆへよもきの露のかすかに涙ぬれしき秋の空かな

菅原在良朝臣

陽のあたる所ばかりの滝はたゝ秋の月をあまる

正三位家隆

月前擣衣

建仁元年八月十五夜和歌所撰歌合

皇大后宮大夫俊成

衣うちの音きゝ月のかたぶくまさえ冴わたる

前中納言定家

秋風よ衣打ぬる

承明門院

月は色もさえ宮は秋風よ和歌ひとつ衣うつ

性助法親王家百首

白妙の袖の初霜月さえて衣うつ

法眼源承

同摂政家歌合

いくかへの秋の夜の月の光をあらしの風の吹かへすらん

今上御製

霜の月の光をあらしの風と共にかさねて衣うつなり

後京極摂政

隣の擣衣

今上御製

外山の初雁なれの花ぬれて衣うつなり

九条右大臣女

菅果て風も面白ぬ故郷の秋を惜て衣うつなり

秋風の音に聞なれぬ小夜衣打そへそめぬ袖の白雲

九条太辞経継

金屋のきく初紅葉ぬれぬ袖を思出や袖の衣うつ

前大納言為氏

衣ぬれと衣うつ伏見山松風さむき秋の夜の月

前大僧正慈鎮

擣衣警夏

警うつ砧の音よ小夜衣うつ袖の夏

伏見院御製

擣衣

警うつ砧の音よ小夜衣うつ袖の夏

辨内侍

金沢の浦の秋の夜の月や獨や人の衣うつらん

搏衣の山を隠れけり

曽祢好忠

衣うつ砧の音は霧に隔て空より落てあるかの

順徳院御製

小倉山すそのゝ里は冬ふかし海邊の搏衣とゝのふらしも

権律師公猷

打寄せし磯は苔屋の塩風さゆる夜の衣うつなり

紀時文

秋深くなりゆく野べの虫の音は聞人さへ涙こぼすなり

順徳院御製

水茎は岩ゐの清菅は茅は蓑霜の降夜や衣うつらん

前大政大臣

虫は鳴こゑうちもしの清菅は中に新さへ有明の月

土御門内大臣

こゝろ引は板の縁はうつるなと初瀬の山を見付けり

入道前大政大臣

雲越て搏をはく初瀬山何をか杵の綿にみるらん

春宮大夫兼季卿

秋の朝晴れ山の秋雪ふるあるいは霞む紀貫之

右太将定国家風屏ふ　忠岑

千鳥鳴く佐保の川霧立ちのぼり山の木の葉も色づきにけり

入道前関白大政太臣家百首歌奉りし　皇太后宮大夫俊成

けふよりは秋の来ぬとて立田山松を河風ふきぬなるかな

元弘二年立后屏風歌　紀貫之

晴れ曇り風吹かぬ日なしとて秋の紅葉しけり

藤原為冬朝臣

水底より新しく物ぬる紅葉かな延喜御時御屏風歌　貫之

紅の深やなり塩竈の浦

紅の所為なるかな秋の色に染まる山の錦なりけり　紀貫之

紅葉色なる山の錦なれば秋の深さも知るわけかな　恵慶法師

同じ所にて色々の紅葉を　傾子内親王

時雨紅葉とりあつめて今ハ世の人の目に見せ

紅葉ちる小倉の山はけふ雨ふりて澤ぬ戸名所の時雨哉

式部卿久明親王

隔りわたいつゝ八重山境ふ雲あるしけふ小倉山哉

西行法師

月照紅葉ふ深く分行紅葉はなを秋の種八重を

藤原經衡

けふ紅ふ染ふ井をたゝこそ時雨ふりまり

院御製

紅葉ふ月の光をさし添て是ぞ赤地ぬ錦なるら

家ふ百首歌ふ時雨の時

関白左大臣

立田川ふ室はの山のちりぬれは紅葉ふ浪ふ深ん日を見

讀人不知

立田川紅葉ふ山の紅葉を今八ちるらし

小山ふ紅葉をんとゝ雨ふ時雨の時雨

貫之

今人をたゝ莫ぬ奥山は紅葉は雨の錦なりけり

宮内卿

立田川紅葉は雨ふ深ん水ふ錦なりけり

たり鹿の紅葉は谷の深きをもとめ

二条院讃岐

渡れば濁る山井の水

前大納言公任

うちしめて爰紅葉を折しれば山路より秋の行くれ

紅葉すゑ先く百首の内

藤原定家朝臣

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮

建武貳年人〻題を撰りて千首のうち

夕しけの時秋桂枝といふ事を詠ずるに

従二位家隆

水江紅葉

立田川紅葉乱れてなかるめり渡らば錦中や絶えん

御製

月前落葉

落葉せし雨と降るかの月の絶えずもるかな

能因法師

風吹こそ山の紅葉は田の川の錦なりけり

前参議雅孝

時雨紅葉は雲はれぬ人目見ぬ嶺の紅葉

貫之

年毎の紅葉なりけり立田川みなぐちや秋の残りなん

藤原清輔朝臣

後三条内太臣

二条院御時春宮の御屏風に

龍田川紅葉乱れて流るめり渡らば錦中や絶えなん

素性法師

延文三年菊合に

坂上是則

初霜は色よりまさる香ぞ匂ふ白菊の花

藤原俊蔭

秋深き籬の霜の置かずとも匂ひ勝れる白菊の花

二品親王覚助

霜枯れの色も今はあらじ霜ぞ匂ふ白菊の一枝

鹿苑院入道前太政大臣

紫の物ぬぎ重ねかけ白菊の花の下枝

中納言資綱

紫の袖にかをる白菊の花の下枝

藤原義孝朝臣

贈従三位為子

月かゝる梅の袖をみぬ郭公霧のうちとさゝれの宿の白菊

式子内親王

草も木も秋の末葉はみな紅葉ぬるゝ色にうつりけるかな

前参議為賢

虫の音の弱るにつれて秋の夜の月の光ぞ長くなりぬる

太宰権帥為経

虫の音の弱るにつれて長月の夜の月の光ぞ長くなりぬる

西行法師

蓬が宿さびしき秋の夕暮にまがきの虫の音のみ聞かるる

皇太后宮大夫俊成

ちりもはて思ふ人も虫の音の弱る秋の夕暮

式子内親王

鶉鳴く野辺の夕暮の秋の雨に袖をぬらすの花の露

藤原兼宗朝臣

秋の夜の長ハ雨をなりぬ秋の雨の長ハ雨をなりぬ

後伏見院御製

九月尽の雨の音の蓬の葉の秋の雨の長ハ雨をなりぬ

大蔵卿有家

秋の夜の長と今宵よ今宵も蓬の葉の秋の雨の長ハ雨をなりぬ

年毎ごとに今は歌うるはりみちのくの秋はなほ遠

登蓮法師

山寺秋雲はいづくんぞ

前大僧正覚忠

さらぬ山の色を山里の秋の雲をぞ

上西門院兵衛

明日ぞ知る身を思ふ先立つ

藤原範家

嵯峨野の秋の夕ぐれ

明日知れぬ命を思ふ先立つ

藤原範家

稲は負ふ今は刈りて御わらさんにけり

法印源賢

切りくる今宵計の秋の空

式子内親王

九月毎の夜積侍りけり

源兼長

紅葉葉の散て色なく海人の釣く秋の空は

続古和謌集巻第四

冬哥

道助法親王家の十首哥より紅葉

藤原信實朝臣

ちはやふる神代も今紅葉する竹田の河の水くくるまで

源清氏朝臣

吉野山秋の木葉の時雨ふる神代の月の影くくるまで

山里は竹田の河の水くくるまで

永胤法師

神代の月影くくるまで

讀人不知

神無月時雨降り侘ぶる色増りの秋

人丸

風さわぐ紅葉はなれぬ神無月庭の時雨なるらん

貞和貳年百首歌

前中納言経顕

急なく時雨の雲は晴れぬれど百首の歌の秋は

宗徳院御製

ひまもなく変る紅葉を埋めて庭は常磐の色ぞ残れる

祝部成茂

名のみして山もあらぬ松の木人の葉よりぞ

如願法師

志しるべ山の紅葉義果くさひき葉に降れるか

宝治百首歌

前参議忠定

拾ふ人の袖の紅葉に時雨なれぬ

權律師尊守

梅の枝に雪間の春を照して匂ひ残れる村雨の

式子内親王

名のみして我ぞ残れる梅の風よ紅葉の袖の移り香

木枯の末の梢の山里は　西行法師

紅葉して淋しかりけり　馬内侍

ちり積る宿の梅の木末にて　前中納言定資

十月はなほ山里の秋の月　能因法師

神無月紅葉に閉る山里の　西行法師

時雨と紅葉の散り交る木の末かな　藤原家隆朝臣

鹿の音は山の空にぞ聞ける

前中納言定家

時雨降る音ばかりぬ梅の木の末にぞ有ける

前大納言爲世

志賀の里の紅葉の錦ぞ深かりける

大納言通具

のへ

ゆく末遠く霧ぞ霧ぞ秋の暮

延喜十四年尚侍藤原滿子の菊宴

けり付

菊の花を前にして月の秋の雲かくれけり　中納言兼輔

同御所大井川に行幸侍りける日

坂上是則

新さらぬ今は昔の菊なれば袖の露のみ濡れそしぬる

殘菊

延喜御哥

霜枯れの花なれども枝ごとに残れる色の多くもあるかな

後一条院御所中宮歌合

庚申の夜月照殘菊

權大納言長家

色変らぬ枝ばかりを菊なれば霜降りぬれば月を照らす白菊

野色月　亀山院御製

霜枯れの色をも今は枯果てぬ菊の花のみ残りてぞ見る

月照寒草　前大納言俊光

霜枯れの花のみ残りて菊の花の色も霜枯れの草

西行法師

草も木も色なき時に成ぬれば月ぞ袖にかかりける

後三条院御製

前大納言資季

今はかぎりの草葉に露もとどまらぬ心地して

皇太后宮大夫俊成

水鳥

いけにすみ侍りける水鳥

恵慶法師

水とり氷ひしぬ人はなくて滝の白糸みだれけり

百首歌たてまつりける時水鳥

左大臣

落ぬなれば鴨の羽を暮浪の

後醍醐院御製

みの池の水はなきて氷ぬ鴨やいかなる

為道朝臣

波風にいとはれぬ水鳥の霜うきねの月ぞ

白河院御製

奥津風ふく日は千鳥なくなれば浪よりよりぞ

源顕国朝臣

波とぬれもよ浪の秋の濱の砂の濱

讀人不知

みの池の上は氷よりいくつ月の庭よりぬ

恵慶法師

月をみて

天の原空さえ渡る氷ぬ月

初雪代

源景明

那かくれとみるは初雪をよりけるやまのよ降やまさるん

能宣

初雪の雪みはけてあるのうちはやまハはるひやまの

貫之

夢覺の屏風に

和かるけはけてみまし初雪代

右大臣

雪の雪と雪積

山里の垣根を雪に埋めて

ゆきをもひとりはるけ武

酸醐の清瀧の社より今はけの時積

積人不去

陸奥の野端の竹を埋めて

雪のうちはけの時積雪代

宝治百首の歌さしけ

後嵯峨院御製

嶺よりはの木末を埋めく山のれくの積の白雪

西行法師

うれ山櫻の降ぬ雪なるし花と見てや暮しも

紀友則

雪ぬけて木毎に花を咲よりはけの山の木ぬ積とおもてはの

禁庭要といふ事代

後醍醐院御製

朝まくはらでいそぐ宮人の跡はれし見ぬ庭の白雪

奈良の京にまかれりける時やどりける所にて

坂上是則

みよしのゝ山の白雪積もるらし古郷さむくなりまさるなり

前大納言為家

時わかぬ月の桂のかどさして花見し庭に降れる白雪

同

はれてみれば夜ふく山の端の有明の月よ残る白雪

元亨三年八月内裏より人のたてまつりし題をさぐく

里くらく見えはしまれける時月の雪とみる事

按察使公敏

花とみる面影ながら山の月かけぬ峯の白雪

正三位家隆

明ぼのゝ雲間のかげの光まで山の端さしも峯の白雪

建保四年百首歌

前中納言定家

明ぬとも見えで人の跡もなし外の外に積る白雪

中納言為氏

いつしかとかれにし人の跡たえて積れる雪も深草の里

後京極摂政

山里は幾重の雪に積りなん軒端に越ゆる松の下枝

前参議教長

深山路ハいつちか雪に埋れゆくいく駒の跡をたつねん

西行法師

駒の跡ハかつ降雪に埋れておくるゝ人や道にまよはん

二条院御製

雪積る嶺にふゝきやわたるらんこしの空に迷ふ白雪

関白前太政大臣

降積る梢や今朝ハをれぬらん風にも落ぬ松の上の雪

摂政太政大臣大納言に侍ける時山家雪といふ事を読せ侍ける

藤原定家朝臣

待人の麓の道ハ絶ぬらん軒端の杉に雪おもる也

権中納言長方

散かねは花とも見よしやみよしのゝ松か枝に積る白雪

法性寺入道前関白

ゆふしほの浦に咲ける花と散るを待つは玉にかゝる雪

冬の哥とて読る

紀貫之

雪ふれハ冬籠りせる草も木も春にしられぬ花そ咲ける

雪の木に降かゝれるを読る

同

冬籠利おもひかけぬを木の間より花とみるまて雪ハ降ける

右衛門督

物の後の御所は一とせ物の花ゆえ殿

千載百首の合　右衛門督通具

草もなほ物の後の雪もなほ花の名残

後鳥羽院御製

通ひわれ和歌の浦路の白雪は消ぬるかぎりなりけり

内大臣

あらぬ世に年あらぬ行末の珍しや雪の降りて

高野の侍法師大原の侍法師大原の行法師

西行法師

大原は良の高峯の雪降りて

花京太夫顕輔

雪深きうち山の高峯の月空さえてこの月の光

中将の侍りける時雪の夜月あらはれける内

の女房あるひとの法勝寺に詣り

侍りけ次てう源師光いさるひて終夜遊て

明るまでありけり

前大納言隆房

あくてう昔の人を思ひ出れば雪もまた友よ月も

正三位知家

年号境の紙に言の葉をかきて

左京太夫顕輔

はるゝと言ふ年代数の表なる成ぬる身をまつ成ぬる

星の行ける跡さへ見えぬるはこゝろの内よりぞ

て御はいみ[illegible]

人のそゝけよりぞ聞て思ひけり

紫式部

水の書て秋世の風の書にんの内にぞ[illegible]

祝部成仲

書のとゝまるんの源[illegible]

抑身よりハ海のゝけ

年代そう境の

春道列樹

明るとゝ今の書てあるべきなれば[illegible]

ゝなれと作りしけり時積て[illegible]

紀貫之

約年代をそなる邪境の紙さんの書ぬと切りしは

左太臣

限ある月日八稀く聞しかれ驚くかれる年代書の邪

成尋法師

あるべぬ方に人年の移るを[illegible]

中納言國信

何事成とはかりよりはかきて今年をくるよりはけるる

前作師俊宗

一とせをくるなれはかなしきものかなしかりしかはる

従二位家隆

花成はかりはかなしかりよりはけりあはれちきみのはけ山

百首御かりの中に 威義院御製

ちとせ

はかりかなしき雪かなれはかはるはやさくらあるん